様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月１５日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010 ～ 2012
課題番号：22520204
研究課題名（和文）　下層社会の表象を焦点とした近代文学における「風景表象」の体系

研究課題名（英文）　A Research on the system of “Description of Landscape” in Modern Japanese Literature and images of Lower Society in Meiji.

研究代表者
中島　国彦　（NAKAJIMA KUNIHIKO）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：00063785

研究成果の概要（和文）：
日本近代の文学と美術との相関に留意しながら、文学作品に描かれた自然や都市、さまざまな風景を「風景表象」としてとらえ、その近代における変遷、いくつかの典型的な事例における特色を分析し、ひいてはそうした見方を支える精神のありかたを歴史的に明らかにした。また、風景を描く文体、表現の特色をも考察した。中でも、明治中期の都市貧民窟を描いた松原岩五郎、足尾鉱毒問題で活躍した木下尚江・田中正造、明治大正の東京を描いた森鷗外・永井荷風・小川未明などの作品については、詳細な分析を加えた。あわせて、京都という場所を踏まえた文章を辿り、その成果を論文・著書のかたちで公表した。

研究成果の概要（英文）：
This research is a new study on the system of “desoription of landscape” in modern Japanese literature and images of lower society of Tokyo in Meiji. Relation between literature and fine arts is very important at modern Japan,and many artists study how image and create this relation into there works.Theworks of Mori Ogai,Nagai Kafu,Ogawa Mimei,Kinosita Naoe,Tanaka Shozo etc. are very interest case at study this theme.The city images in Tokyo and Kyoto are full of variety. We must more research on this point of view

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：日本近代文学・風景表象・自然描写・都市表象・木下尚江・森鷗外・木下杢太郎・京都

１．研究開始当初の背景

（1）日本の近代文学と美術との相関は、以前から言われ、いくつかの達成が見られるが、近代文学の歴史を見据えたものでなく、扱われる文学者も限られたものであった。そうした現状にあって、早くからその重要性に着目してきた一人として、その体系化を試みるべく、努力を重ねてきた。学位論文『近代文学にみる感受性』（1994、筑摩書房）は、その一端を示したものである。

（2）平成 17・18 年度の科学研究費補助金（基盤研究 C・課題番号 17520129）を受けること

で、更なる研究の展開をはかった。「文学と美術の相関からみた「風景表象」の体系的研究」という題目で、これまで論じてこなかった文学者を扱い、重要な文学者においてはより深く分析した。その際、新たに「風景表象」という概念を定立して、体系性を明らかにした。「風景表象」とは、単なる自然の風物でなく、例えば都市の風景、目に見える視野に入ってくる何気ない光景まで含む、多元的な概念である。

(3) 平成 19・20 年度の科学研究費補助金（基盤研究 C・課題番号 19520170）の成果として、学術論文をいくつか発表したが、そこで扱われたのは、永井荷風・島崎藤村・小川未明・水野葉舟・長塚節などの文学者で、「闇」を用いた新たな文学史の構想なども試みた。東京と地方における「風景表象」の差異についても、提言を行って来た。

２．研究の目的

（1）平成 22～24 年度の本研究の基本的目的は、明治・大正・昭和の文学の流れを絶えず美術との相関で考え、その相関が近代という時代性と関わっていること、その相関から各文学者・芸術家の営為が深く浮かび上げって来ることを論じ、新たな近代文学像を確立することにある。更に、風景概念を定立し、その文化史・思想史的意味を考察することにある。その際、これまで十分に論じられなかった社会の裏面、下層社会の光景が、分析において要になることを指摘し集中し分析した。

（2）平成 17～20 年度の成果の延長として、新たな構想で平成 22～24 年度に臨んだが、その際、近年の「風景論」「空間論」「都市論」「自然論」の成果を踏まえて、次の 4 点に目的を設定した。

①研究対象を従来扱った文学者以外にも拡大して、体系化をはかる。

②近代の芸術家の「精神史」 という概念を導入し、それを文学表現、言語表現を通して明らかにできるような方法を見つけ出す。

③対象を、単に自然のみならず、都市の光景、中でも下層階級の生活の場としての貧民窟、未開発の土地に設定し、これまで文学史に位置づけにくかったルポルタージュ作家、明治の新聞人、社会活動家などの営為をクローズアップすることを通して、新しい文学史の構想を考える。

④未整理の資料、例えば早稲田大学文学学術院所蔵「木下尚江資料」を有効に活用することを通して、新しい資料の紹介、社会への発信を試みる。

３．研究の方法

（1）「風景表象」の典型的な例を、より豊富に収集し、具体的に分析を加える。その時、なるべく明治・大正・昭和三代に広げられるように文学者を選択する。今回選んだのが、

松原岩五郎『最暗黒の東京』―明治の貧民窟ルポルタージュとその後継

木下杢太郎『南蛮寺門前』―長崎の自然から、異教のイメージの空間を描く

永井荷風の昭和の東京を描く『つゆのあとさき』及び戦時中の日記

吉井勇らの描いた京都の風景とその意味あい

木下尚江の見た東京・盛岡

田中正造の足尾鉱毒問題の中の営為

といった諸作品・テーマで、いずれもこれまでの作品選択の延長で、新たな展開に必須の作品・テーマである。それぞれを丹念に分析、その意味を明らかにする。

(2)文体からみた「風景表象」の流れを明らかにする。「風景表象」の特質を明らかにするためには、それぞれの時代の典型的な文体・典型表現が見られるので、それを抽出し分析する。

（3）「風景表象」における夢と現実に注目し、文学者の描写に見る幻想性、描かれた光景のあいまいさ、理想化について、新たな提言を試みる。

（4）海外の「風景」に関する概念・理論を収集、検討し、研究に資するようにする。あわせて、近年盛んになった都市空間の新しい成果、特に東京などを高低の面から再発見する試みを分析し、「自然」「風景」がどう扱われてきたかを辿ることとする。

４．研究成果

（1）授業での成果公表

研究成果の一端は、日常の授業の中にも生かされている。たとえば以下の通りである。

大学院文学研究科「日本文学演習」（修士課程）

文学部「近代の文学と文化」（１～4 年）

いずれも、論文化する前、あるいは論文化したものを講義する形で実施した。その一部は、早稲田大学の社会人向けの講座「オープンカレッジ」においても講義した。

（2）学会発表による成果公表

今回試みたのは、2 点で、まず早稲田大学の比較文学研究室の月例研究発表会で、木下杢太郎の戯曲を材料に分析、論文化した。

次に、フランスのアルザス欧州日本学研究所での国際シンポジウム「多面体としての《森鷗外》」に参加、各国の学者と一緒に鷗外を材料にした研究発表を試みた。鷗外の記念の年にあたり、外国で東京を背景にした作品『青年』を分析する事は、貴重な経験となった。報告集に論文化したが、「空間構成」の面から作品を積極的に捉えようとしたことは、意味があったと思う。

（3）学術論文・著書による発表

①永井荷風の描く風景と現実性

編集委員として関わった『荷風全集』の別巻を編む機会があり、これまでの文献を再検討、中でも戦時中の岡山疎開時の軌跡を丹念に調査、実際に岡山・勝山に赴いて、荷風の描いた風景と実際の風景の関連を調べた。その成果はまだ活字になっていないが、論文化は終わっており（フランス語で公表予定）、探索は終盤に差し掛かっている。

アメリカ・フランス滞在を終えて帰国した永井荷風は、次第に東京に眼を向ける。荷風が東京生まれ、東京育ちであることも大切である。東京の「風景表象」が、そこから展開する。荷風がこだわったのが、日露戦後に急速に実施された、東京の改造である。時代の急転換、急成長時には、都市はどんどん改造され、懐かしい「風景表象」は失われていく。鋭い文明批評から江戸趣味に転換していく荷風の推移においては、失われつつある都市風景への愛惜が、顕著となろう。『つゆのあとさき』は昭和初めの作品だが、古くからの風景を踏まえつつ、そこに動く人物は昭和の風俗そのものである。そのため検閲の対象にもなり、出版社はその検閲をくぐり抜けるための対策を講じた。その実態にも目を向けて論文化した。また、戦時中の岡山の疎開時において、荷風がどういう光景を見ていたのかを、実地踏査を踏まえ詳細に分析、さらに遠くに避難した勝山をも視野に入れた考察を試みた。自然の光景を写真に撮り、映像面からの論理の補強をしたことも、特記すべきであろう。

②小川未明と幻想性

小川未明は明治末の東京山の手に住み、自然光景を描いた作家だが、その出発期にはラフカディオ・ハーンの影響があった。しかし、ハーンはかならずしも現実的な文学者ではなく、かえってその描く光景は幻想的なものが多い。言わば、小川未明は西洋の幻想性と、故郷の自然の両者に引き裂かれた形になっているのである。ハーンの文章を辿りつつ、未明がどういう点でハーンの影響を受けたかを論文化した。

③京都をめぐる文学者

東京のみならず、京都も多くの文学者によって描かれた都市である。しかし、その形象にはおのずから違いがある。論文では、明治末の紀行文『五足の靴』から始め、古くは正岡子規、更には志賀直哉や吉井勇等の作品に描かれた京都の「風景表象」を分析する。吉井勇の表現に、江戸の漢詩人の作品が影響していることなど指摘出来たのは、成果である。

まだ論文化していないが、京都の祇園を背景にした近松秋江の『黒髪』連作の場所を調査した。祇園の中の迷路のような場所を「迷宮」として捉え、さらに京都の郊外に女を訪ねる行程を実際に体験すると、作品に流れる意識を考えることが出来ると思う。早い時期に、論文化したい。

④森鷗外における東京の風景

鷗外の長篇『青年』は、東京に住んだ森鷗外の土地勘のよく出た作品である。鷗外は、『東京方眼図』という地図の刊行も試みた。それには高低は記されていないが、明治の地形図を便りに作品を読むことで、思わぬ視点が現われたりする。特に人物の動きと内面の心理がしっかりと結び付いていることは大事である。論文の中で、そうした視点についての提言を試み、作中人物を場所の中に置くことで、どういう心理的変化があり、それがどういうドラマを生み出しているかについて、明快に論じた。

⑤木下尚江の業績の検証

文学学術院には木下家から譲っていただいた資料が、「木下尚江資料」として存在する。この未発表資料を紹介しつつ、資料の意味付けを心掛けた。今回、『木下尚江資料集』の第 2 集、第 3 集を刊行することが出来た。本研究と関係が深いのは、第 3 集に翻刻紹介した、尚江の東北滞在時期の家族宛書簡である。盛岡に夫人と滞在した折、夫人の病臥により、尚江は長期にわたり盛岡に滞在した。町の様子、周囲の自然の光景、鉛温泉のたたずまいなど、書簡からは尚江の「風景表象」への視線がよくうかがえる。それが、汎神論的自然観の現われのように感じられるのである。

⑥木下尚江と田中正造の関係の意味づけ

「木下尚江資料」には、足尾鉱毒事件で活躍した、田中正造の、尚江宛書簡が未発表資料として存在する。その紹介を試みながら、二人の関係を分析した。足尾鉱毒事件は、単に政治的側面だけでなく、日本の自然環境を考えるうえでの、重要なケースである。下流の谷中村にどうして鉱毒が現われるかは、水利問題、河川の管理問題、ひいては人間と自然の共生の問題につながる。そうした視点に立ち、書簡を通して二人の関係を分析した。現在まで、1910 年までの書簡を紹介したので、1911 年以降さらに続稿を執筆する予定である。

⑦「風景表象」を支えるもの

今回は、「風景表象」を支えるものとして、時代の芸術状況を重視した。特に、1910 年代は、そうした傾向が顕著になった時期である。木下杢太郎の戯曲『南蛮寺門前』を素材に、そこに現われた文学表現・美術的要素・音楽的要素を確かめる作業を通して、「風景表象」が真に活かせるには、その背景の芸術状況が大切であることを論じた。比較文学的アプローチであるが、この方法は今後、さらに試みられていいもの

かと思われる。その点を確認することも、成果の一つとなっている。
⑧その他の成果
　年度内に論文が出来なかったテーマでも、その準備の調査を進め、資料の収集を試みた。
松原岩五郎『最暗黒の東京』注釈作業
水野葉舟の小品と自然描写
など。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）
①中島国彦　東京の「崖」、内面の「崖」―鷗外『青年』に見る空間構成―　報告論集・多面体としての《森鷗外》　pp. 92-101　2013　査読無
②中島国彦　一九一〇年前後の文学・美術・音楽の交響―木下杢太郎『南蛮寺門前』を手がかりに―　比較文学年誌　第 49 号　pp. 1-20　2013　査読無
③中島国彦　木下尚江と田中正造、一九一〇年まで―新資料・木下尚江宛田中正造書簡の紹介―　早稲田大学大学院文学研究科紀要　第 58 輯 3 分冊　pp. 21-37　2013　査読無
④中島国彦　京都の遠景、京都の点景―『五足の靴』・志賀・子規・吉井勇に見る風景表象―　国文学研究　第 167 集　pp. 47-59　2012 査読有
⑤中島国彦　永井荷風「つゆのあとさき」の本文と検閲　『検閲・メディア・文学』　新曜社　pp. 78-86　2012　査読無
⑥中島国彦　「凝視」と「想起」の間―　永井荷風・谷崎潤一郎・志賀直哉の戦中・戦後―　『記憶の痕跡―WIJLIK 報告』　国際日本文学文化研究所　pp. 3-14　2011　査読無
⑦中島国彦　作家出発期の小川未明―ラフカデイオ・ハーンとの関わりから―　国文学研究　第 146 集　pp. 1-14　2011　査読有

〔学会発表〕（計 3 件）
①　中島国彦　東京の「崖」、内面の「崖」―鷗外作品に見る空間構成―　国際シンポジウム・多面体としての《森鷗外》　2012・12・10　アルザス欧州日本学研究所　招待研究発表
②中島国彦　一九一〇年前後の文学・美術・音楽の交響―木下杢太郎『南蛮寺門前』を手がかりに―　早稲田大学比較文学研究室月例研究発表会　2012・10・25　早稲田大学比較文学研究室

〔図書〕（計 3 件）
①中島国彦　『木下尚江資料集』第 3 集　早稲田大学国際日本文学・文化研究所　全 46 頁　2013
②中島国彦　『木下尚江資料集』第 2 集　早稲田大学国際日本文学・文化研究所　全 166 頁　2012
③中島国彦・竹盛天雄　『荷風全集』別巻　岩波書店　485 頁　2011

６．研究組織
(1)研究代表者
中島国彦（NAKAJIMA　KUNIHIKO）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：00063785
(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし